
シロウサギを捕まえて

時計の音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シロウサギを捕まえて

【Nコード】

N0381I

【作者名】

時計の音

【あらすじ】

朝、いつも通りに学校へ行こうとして、ドアをあけるとそこには友人の有心と、クロと名乗る少年がいる。彼らは美雪に「シロウサギを捕まえて」とお願いするが……？

一章

朝、私はいつも通りの時間に起きる。いつも通り身支度をする。そして、いつも通りかばんを持って学校へ向かおうとした。いつも通り——ついさっきまでは。

私の部屋は、ドアが一つしかない。だから、部屋を出るときもその一つのドアからでる。

ドアを開くと、廊下がある。訂正、廊下があった。

おかしい！ この状況はかなりおかしい！ 何で！？ いつも通りだったよね！？

ドアを開くと廊下ではなく、よく知った人物と、知らない少年がいる。

「おはよ、美雪^{みゆき}！」

「……」

ボタン。力強くドアを閉めた。

落ち着け、落ち着け、私。気のせい、絶対に気のせいだ。よし、もう一度。

ドアを開くと——二人の少年がいる。

気のせいではない。気のせいじゃなかった。

「ひどいよ、美雪。いきなりしめるなんてさ。ね、クロ」

彼は、となりのクロと呼ばれた人物に同意を求める。

「うん。このまま開けてくれなかったら、どうしようかと思った」クロ、そう呼ばれる人物は真っ黒な髪をしている。

ふいに、ノラの黒猫を思い出した。

ノラなのに、きれいな毛並みで、人懐っこい猫。家では飼えないので毎日えさを黒猫のいる公園へ持っていった。かわいい、かわいい、ノラ猫。

名前はクロ。

似てなくはない。しかし、猫が人になれるわけなく……。

「えーと、有心ここで何をしているわけ？」

彼は、宮内^{みやうちゆうと}有心。私の友人で、2つ下の中学二年生。お人よしで、天然。典型的な「いい人」だ。私はひそかに有心が、いつか騙されるんじゃないかと心配している。

「美雪、シロウサギを捕まえよう」

有心は真剣な顔で言う。たぶん、真剣な顔でいうことじゃないと思う。

だいたい、シロウサギなんてこちらへんにいるわけがない。

「だめよ。これから、学校なの。だいたい、こんなところにシロウサギなんていないよ。有心も学校でしょう？」

そういうと、かすかに空気が固まった。だが、すぐに空気はもとに戻る。

「お願いします！　じゃないと……」

クロが涙目になる。有心と同じくらいの歳だろう。しかし、気弱に見えるせいか幼く見える。

泣かれると弱い。なんというか、ほっとけない。

「えっと、ごめんなさい！！　だから、泣かないで！」

クロは、おずおずと聞く。

「じゃあ、捕まえてくれますよね！　美雪さん！」

もう、逃げられない。断ったら、泣きそうだ。

「う、うん。わかった」

了承してしまった……。

クロの隣で有心がくすくすと笑っている。

おもしろがって……。あとで覚えてろよ……。

「じゃあ、行こうか」

有心がまだくすくすと笑いながら言う。

学校は、諦めよう。諦めて、二人が満足するまでつきあおう。でも、その前に……

「ねえ、クロ……だったよね？」

クロは元気よく「はい」と答えた。もうすっかり涙は引っ込んだようだ。

「どうして、私の名前を知っているの？」

クロは一瞬驚いて、笑った。

「有心に教えてもらったんです。僕と有心は、友達なんです」

「そうなの、有心？」

「そ、そうだよ。つい最近友達になったんだ」

少し間があったような……。

しかし、それを気にするヒマなんてなかった。なぜなら、突然めまいに襲われたからだ。

「……！？」

吐き気にまで襲われて目の前が真っ暗になる。

私はそのまま意識を手離した。

一章（後書き）

未熟ですが、お付き合いください。

二章

ここは、どこだろう。私……何をしていたんだっけ？ そうだ、有心とクロっていう少年に頼まれたんだ。何を、頼まれたんだっけ？

ああ、思い出した。私は、シロウサギを捕まえるんだ――

「う……ん」

眩しい。目を覚まさなきゃ。

私は重い体を起こす。まだ、ぼうつとする。

「あ！ 有心、美雪さんが起きたよ！」

目の前に、人懐っこそうな顔がある。ああ、クロだ。

やはり、あのノラ猫を思い出す。あの子も、人懐っこかった。呼ぶと、嬉しそうに駆けてくる。猫、というよりは犬に近い気がするかわいい猫。

私は小さくクロ、とつぶやく。

「呼びましたか？」

「え！？ ううん、なんでもないよ」

びっくりした。そんなに大きな声をだしていなかったのに。

しばらくすると、有心が来た。

「大丈夫か！？ 突然倒れるから……。体とかなんともないか？」

「うん、大丈夫。それより、どこに行っていたの？ そして、ここはどこ？」

倒れる前は、自分の部屋にいたはずだ。しかし、ここはどう見ても違う。

絶対に日本じゃない。日本でもなければ、地球でもない。

地球にこんなところがあるなら、考えを改めなければならない。

「そこらへんを見てたんだ。少し行ったところに家があるから、そこに行こう」

「うん」

シロウサギはどこだろう？　そしてここはどこだろう？

まわりは、森。なんだか、童話にできそうな場所だ。生えている草は、絶対に地球にない。色がおかしい。水色の草なんてみたことない。

それをスルーするこの二人は、さらにおかしい。全然困惑していない。困惑しているのは私だけだ。

「ねえ、二人とも」

「何？」

二人は同時に私を見る。私は、問題の草を指を指している。

「この草、おかしいよ！　色が水色って、ありえない」

二人は、驚いている。

え？　気づいていなかったの？　ちょっとみればわかるのに。

「本当だ！　へー、こんな草もあるんだ。凄いな」

有心なもの。仕方ない。仕方ない……と思うことにする。

「不思議な草ですね。僕、初めて見ました。世界は広いですね」
こっちもこっちだ。

二人の天然ぶりに呆れつつ、空をみあげる。

「!!??」

もしや、と思ったが空もだ。空には虹がかかっている。それならだけならいい、しかしだ。

しかし、なぜだか太陽に顔がついている。雲も、もくもくしている。これじゃあ、子どもの落書きだ。

「空も凄いよ……小さい子が描いた空になっているから」

二人はまた驚きの声をあげる。

ここは本当にどこだろう？ 小さい頃描いたような太陽に、水色の草。

そういえば、昔かいたことがあったけ。

水色の草は、ソーダーの味がするとか言っ。太陽は、私を見てるとか言っ。顔をつけたり。

「ね、もうそろそろ行かない？」

他に変わったところがないか探す二人に声をかける。

「え？ わかった」

「そうですね」

有心は、こつちと道案内を始める。

そのときだ、とつぜん目の前にウサギがあらわれた。

真っ白な毛で真っ赤な目。

クロが声をあげる。

「シロウサギさんです！！」

「いた！ 捕まえて、美雪！」

有心が指示をする。

「え、私！？」

私はシロウサギへと手をのばした。

三章

「大丈夫ですか、美雪さん」

「らいじょうふひやにゃい」

「大丈夫なわけないよ」

有心の言うとおりで。大丈夫なわけがない！！

私は鼻を押さえながら、立ち上がる。

「しろうしやぎににぎえりゃれた」

「シロウサギに逃げられたって、見てたから分かるよ」

有心は半ば呆れ気味だ。

「シロウサギさん足、速かったですね」

「確かにそうだけど、それ以前の問題だぞ」

明らかに私をみている。

そうですよ！ 私がどんくさいんですよ！

自慢ではないが、私は極度の運動音痴だ。逆上がりなんてできない！ 跳び箱もできない！ 走ることもなんてもう論外！ という具合だ。

「うるひゃい、ゆーと」

軽く足を踏む。

「いてっ！」

これくらい我慢すればいいと思う。私は鼻をぶつけたんだから。

「人は住んでいるのかな？」

「どうだろう？」

「住んでいるといいですね」

私たちは、有心が言っていた家を目の前に立ちつくす。

その家はいかにも出てきそうだ。何がって？

言いたくない。アレは嫌だ。この歳でも嫌だ。

出たら泣く。泣きわめいてやる!!

妙な決意をし、私は扉を叩いた。

トントントン。

しんと静まり返る。

「出ない……」

「もう一度どうでしょう？」

「よし、やってみる」

今度は有心が叩く。

トントントン。

「出ませんね」

「留守なのかな」

「いっそのこと壊すか」

有心が軽くこぶしを握る。

「壊したとたん、そこらへんの木につるすよ」

「嘘です、ごめんなさい」

有心は高所恐怖症だ。小さい頃ほんの遊び心で木から彼を突き落とした。

それ以来、有心にはトラウマのひとつとして残っているらしい。

我ながら酷いことをしたものだ、と思う。

パッリーン!!

「え!?!」

「ん!?!」

私たちはいっせいにその音の方向をみる。

今の音は絶対に何か割った音だ。

「……クロ？」

音の方向には、鳥を片手にしているクロと割れた窓ガラス。

「ぴー、ぴー」

鳥が泣く。

「何やってたんだ？」

有心は聞く。半分呆れ気味だ。

「えーと、鳥が飛んでいたので」

「で？」

だいたい次に返って来る答えは予想がつく。

「捕まえようと跳びかかったら、窓ガラスに」

ぴき……

次の瞬間、私の怒鳴り声にそこらにいた鳥たちは逃げ出した。

「わー、ごめんなさいごめんなさい」

「周りをみなさい、周りを！ 猫じゃないんだから！」

「僕は猫です」

「人間でしょ!？」

「でも猫なんです」

美雪の説教は10分くらい続いている。あと15分は続くであろう。

こんなにも怒るのにはそれなりにわけがあったりする。

オレは、あの時を思い出す。

それは二人仲良く小学校へ登校しているときだった。

「こら、有心！ 石なんて投げちゃいけないのよ!」

あの頃のオレはガキで、美雪を無視して石を木へと投げつけていた。

ガンッ

その音は、何かに当たった音だった。何か――カラスだった。

「うわ！」

「ほら、だから言ったの！ 逃げよう！」

美雪はオレの手を引っ張る。

オレは半べそだった。今思うと情けない。

ああ、美雪姉の言うとおりにしていれば、とただ考えるだけだった。

その後、カラスから逃げられず襲撃された。あの時、母親が助けにこなければかすり傷程度ではすまなかっただろう。

オレたちは泣いていた。かすり傷が痛くて、痛くて。

美雪はオレにずっと謝った。「ごめんね、ごめんね」と。

悪いのはオレなのに。

美雪は、自分に責任があると今でも思っているはずだ。

自分がやめさせていなかったからと。あの時、きつく注意していれば、と。

だから、今も注意している。

もう二度とさせないように。

ガラスで怪我をしないようにと。

クロは必死にコクコクとうなずいている。

素直なやつだから、もうしないであろう。

いつからだろう、いつから。

「姉」と思っていたのが、一人の女性としてみえるようになったのは。

オレは今、恋をしている。

初恋は数年間続いている。

オレの初恋は、今も続いている。

三章（後書き）

スローペースの更新で、すいません。
一日一話！とは行かず……

感想などくれたら嬉しいです。

四章

「すみません。窓ガラスを壊してしまつて」

彼女——明子と名乗るおばあさんはにこにこ微笑んで言った。

「いいんですよ。若いうちは元気が一番ですよ」

いい人だ、この人すごくいい人だ！！

「ほ、本当にごめんなさい！　僕、鳥とか見るとつい飛びつきたくなるんです」

クロも謝る。半泣きだ。もとからかわいい顔をしているが、半泣きだとなんだかいつもよりかわいい。小動物とかに思えてくる。

「謝らないでいいのよ。ここは、記憶の中でしかないから」
き、おく？

意味が分からない。記憶の中？　ここは、異世界なのに。

「記憶って？」

ああ、と明子さんは微笑んで答えた。

「気にしないでください」

そういわれて、追求するのはやめた。きっと何かあるんだろう。

「そうだ、皆さんお家に上がっていかない？」

「え？　そんな、悪いで……」

「ぜひ！！」

有心は食いついた。さらに、クロも。

「元気がいいわね」

明子さんはころころと笑って家へとあがった。

窓ガラスを割って、クロに説教をしているときにこの家の家主が帰ってきた。

それが、明子さん。

むかし、好きだったおばあちゃん。好きだったけど、顔も名前も覚えていないおばあちゃんに彼女は似ている気がする。

「はい、どうぞ。たいしたものはないけどね」

紅茶がテーブルへ並べられていく。お菓子も並べられていく。

有心はごくり、とつばをのんだ。

どれだけ、食い意地がはってるんだろう……

「いえいえ、そんなことないですよ！！ オレ、全部大好物です！
」

とびきり大きな声で有心は言った。

う、うるさい。

クロも苦笑いだ。

「いただきますね」

私は軽くおじぎをして菓子を口に運んだ。

「おいしい」

それは本当においしかった。懐かしいあじがする。

有心もおいしそうに食べている。

「クロ、食べないの？」

クロは、へ？ となんとも気の抜けた声をあげて軽く笑った。

「僕、はじめて見たんですコレ。なんだか食べるのがもったいない
なあと」

クッキーをはじめて見るなんて、なんて珍しいんだろう。

私はクッキーよりも、彼のほうが珍しく思える。

「クッキーって言うの。おいしいよ」

私がそういうと、クロは一つ口へ運んだ。

目がきらきらと輝く。どうやら気に入ったようだ。

「おいしいです！ 初めて食べました！ こんなにおいしいなんて
……」

なにやら凄い感動しているようだ。

有心はあいかわらず、クッキーをほおぼっている。

明子さんは、にこにここと微笑んでいる。

「もう、行ってしまうのね」

明子さんは、うなだれる。明子さんがうなだれると、私は胸が痛くなった。

「はい。私達、シロウサギを追いかけていなければいけないので」

明子さんは一瞬だけ切なそうに目を細めた。

「そう。ならしかたないわね」

「ありがとうございます！」

クロと有心がお礼を言う。

「ねえ、美雪ちゃん」

明子さんが語りかける。

「何ですか？」

「一度でいいから、おばあちゃんって読んでくれないかしら？」

少しだけおどろいた。おばあちゃんと、明子さんが重なった。

泣きたくなる。おばあちゃんに伝えたくなる。

もうしばらく、おばあちゃんのお墓にいていない。もとの世

界に帰ったら、おばあちゃんに会いに行こう。会いに行って、たく

さんたくさん伝えよう。

私は元気だよって、伝えよう。

私は心をこめて言った。

「おばあちゃん、またね」

「またね、美雪ちゃん」

一礼して、シロウサギの逃げたと思われる方向へ進む。

またね——たぶん、もう会えないけどサヨナラとは言いたくなかった。またね、って言いたくなった。

後ろをふりむくと家と明子さんはいなくなっていた。

「え!?!」

そして、明子さんがいないかわりにシロウサギが立っていた。

「はい!?!」

「リベンジできるな、美雪」

「シロウサギさんですね!」

ふしゅっ——シロウサギはもういない。

「なぜに!?!」

「マジックだよな」

「足速いですね」

シロウサギを捕まえるのに、どれだけの苦勞をようするか……
私は考えたくなかった。

四章（後書き）

シロウサギを捕まえる旅（？）はまだ続きます。
おばあちゃんに似た明子さん。どうでしょうか？
最後には、なぜ家もろともなくなっていましたか？
それにはそれなりに意味があったりします。

その意味は、いずれ……

五章

「助けたいか……？」

誰を助けるの…？

「はい」

「どんなことでもするか？」

誰？ 誰なの？

「はい」

有心が助けたいのは……誰？

嫌な夢だった。有心が誰かを助けようとする夢。

有心が誰かを助けるのが嫌なんじゃない、彼がしゃべっていた相手……。

あれは、鎌を持ち、赤い目をしていた。

あれに何かを願ったら、たぶん取り返しのつかないことになる。

何かを失くすと思う。

とにかく、嫌な夢だった。

「本当に大丈夫ですか？」

「うん。ちょっと、貧血を起こしたただけだから」

私は、さっき倒れた。軽い貧血だと思う、もうすっかり元気だし。というわけで、はやくシロウサギを探してココから抜け出さなきゃ。

「無理しないでくださいね！」

クロは心配そうに、眉を下げる。

かわいい、かわいすぎる！！　よわよわしい子猫のような感じがする。

「うん、大丈夫だから。クロは歩き疲れてない？」

「大丈夫です！　猫ですから！」

素直でかわいくて：ちよつと変わっているけど。

「美雪」

「何、有心？」

さっきの夢が一瞬頭をよぎる。

大丈夫、アレは夢。夢だ、現実じゃない。

「アレ、だれかいる」

有心が指差す方向には、テーブルと数脚のイスが置かれていた。そして、そこには二人の人影と一匹の影があった。

「よってみる？」

「いいにおいがしますよ！」

くんとクロは臭いをかぐ。……犬？

「よし、いこう！　そして、何か恵んでもらおう！」

有心、目的が違う。

「シロウサギのことを聞くんでしょう？」

「よし、ついでにそれも！」

「それが、目的よ！」

ともかくして、そこへ私たちは向かった。

六章

「助けたいか……?」

「はい」

「命が代償と言っても?」

「はい」

「では、命だけは助けてやろう。死ぬ前に、働いてもらうぞ」
「ありがとうございます!!」

「すいませ……わぷっ!?!」

飛んできた、何か飛んできた!

「命中……!! っ、スリープじゃない!?!」

声がる、幼い声だ。おそらく、私にケーキを投げてきた張本人。
「有心、美雪さんの顔についているのは何です?」

「たぶんケーキ。って、ケーキも知らないのかよ!?!」

「猫ですもん」

「……」

そこ、不思議な会話してないで助けようよ。

「本当にごめんなさい!! 僕、スリープを起こそうとケーキを投
げてて」

「だ、大丈夫だよ。だけど、ケーキは投げちゃいけないよ」

起こすためにケーキはなげだらいけない。もったいない!!

「ケーキをなげなきゃ、起きないんで」

「えー……」

ケーキを投げなきゃ起きないってどんな人間なんだろう。

「人間じゃないよ。僕らは、人々が置いていった記憶だから
はい……？」

「スリープって、この大きなねずみ？」

「そうです！　ねずみです！」

ねずみだったんだ。人間じゃないよね、うん、納得！

私たちは、帽子屋とスリープ（ねずみ）のお茶会に参加させてもらうことになった。

「帽子屋、ここはどこなの？」

帽子屋はお菓子に手を伸ばして答える。

「えー？　つなぐ世界」

「どここと？」

すると、帽子屋はふーんと笑って有心をみた。

なんなんだろう？

「言わない方がいい？」

「普通聞く？」

「ほら、記憶だって言ってるでしょ？　こういう性格の人も僕のなかには入ってるんだよ」

いや、意味が分からないから。

「なるほどねー」

有心、わかるんだ……。

「シロウサギさんも意外と優しいね」

「シロウサギさんは優しいですよ！　僕らの願いを聞いてくれたんですから」

クロの願い？　うー、わからないことだらけだ。

「はは、素直だね。これ以上この話をするとか美雪が混乱しちゃうからやめようか」

「混乱もなにも、話の内容がわからないよ」

「気にしないでいいですよ、美雪さんは」

クロの笑顔は私を不安にさせた。

一人だけ知らない。

それはとても、不安なことだ。

六章（後書き）

意味が分からない帽子屋との会話でした。
ちゃんと意味はあります。

そのうち、徐々にわかるはずです。

そのうちは、まだ先だと思いますが……。

もう少し、帽子屋とのお茶会は続きます。

七章

知らないことは、知りたい。

そのせいで、嫌な思いもした。

それでも知りたい。知っていたいの。

「では、帽子屋さんたちはここで道案内をしているんですか？」
興奮気味にクロはテーブルに乗り出した。

「ほら、方向音痴ってよくいるだろ？ 間違っであっちへいったら大変だ。きちんと川を渡らなきゃな」

「川って、あの冷たい？」

「どうやら川も知らないらしい。どんな人生送ってきたんだ、この子。」

「今の時期は冷たいな」

「有心は知っているんですか？」

「あたりまえだ。つーか、毎日みてる。学校行くときに通るし」

「その川じゃないんだけどな」

帽子屋が二人の会話に口を挟む。

「ああ、オレはわかってるよ。クロもそれについてはわかってる…
…よな？」

「もちろんです！」

クロが元気よく返事をする。

「帽子屋、ただいまあ！」

「お、帰ってきた」

走ってきたのはキレイな女性だった。

「お客さん？」

「シロウサギを追いかけているんだって」

「シロウサギ！？ う、あたしアレ苦手なのよ」

キレイな女性は、帽子屋と楽しそうに話す。

そして、私たちのほうをみる。

「こんにちは。あたしは三日月。ここで道案内をしているの」

「美雪です」

「有心で、こっちがクロ」

「よろしくです」

よろしく、と微笑む。

キレイな人……。絶対にもてる！

「シロウサギを探しているならあっち」

指を指した方向はさっき、私たちが通った道だった。

「さっき通って……」

「こっちへ来てはダメよ」

なぜかその声は、ぴしゃりと厳しかった。

「スリールや帽子屋、あたしのこと、忘れないでね」

「え？」

どこか切なそうに笑っている。

「記憶って、不安定なの。正確には覚えていられない」

忘れてしまうもの——それが、記憶。

「正確じゃなくてもいいの。ほんの一部でいいから、忘れないで」

忘れなければ、どんな形で残り残っているから。

「美雪ちゃん、シロウサギはね確かな心を持っていれば必ず捕まえられるから」

よくわからない……でも、応援してくれてるんだよね？

「帽子屋や、三日月さん、スリープ……全部忘れません！！ 絶対に……」

「また会いましょう、帽子屋さん、三日月さん、スリープさん」
クロは一礼して言った。

「またな。絶対に会うから。そのときは、お茶会しような」

帽子屋はにかりと笑って手を振った。

私たちはお茶会をあとにした。
来た道に戻って、違う道を見つけてそちら側へと向かう。

「また、絶対に会う」——本当に？

記憶は、忘れるもの。

忘れてしまうもの。

でも、残っているものもある。それが確かじゃないとしても、

その人にとったらどんな形であり、心に残っている。

七章（後書き）

帽子屋たちと別れて今度はお城へ……。

そういえば一言もスリープがしゃべっていない。
そして、若干キャラが変わった帽子屋。

そういえば、有心もキャラが変わったような……。

作者が未熟な証です。

八章

知らない方が良かったんだ……。

あの子犬がどうなったかを。

それでも、それでも知っていたい。
知らないということは、嫌だ。

「有心と僕はつい最近であったんですよー」

クロは嬉しそうに話す。ころころと笑っている。

その反面、有心は無愛想だ。

（機嫌が悪いんだな、有心）

美雪はクロの話に耳を傾ける。有心はこういう場合、そっとしておいた方がいいからだ。

「クロって、犬みたいよね。たまに猫だ、とか言い張るし」

そう美雪が言うところクロは、ぷくつと頬を膨らませて反論した。

「だから僕は猫なんですって。でも、犬みたいとは言われましたよ。
どうしてでしょう？」

（どうしてって、人懐っこいからじゃないかな）

そう思ったが美雪は、言うのをとどめた。

有心がやけにしゃべらない。そしてさっきから、怒りのボルテージ
が上がリつつあるような気がするからだ。

「有心、どうしたの？」

「別に……」

「別について、何かあったようにしか思えないよ。私何か悪いことでもした？」

「……」

すると有心はしばらく黙って、そして口を開いた。

「秘密」

（私絶対に何かした！！）

若干空気が重い中城へと着いた。

「シロウサギ、ここにいるのかな？」

「いるといいですね」

「……」

ガシャン！

「な、何！？」

突然皿が割れるような音が聞こえた。

ドンッ、ズタズタ！

「今度は、転ぶような音ですね」

三人は呆然と立ち尽くしている。

この中で何があったのかと考えるが、どれも好ましいことがあったとは思えない。

しばらくすると、一人の女性が扉を開けた。

「こんにちは、お客さん♪」

「こ、こんにちは」

「こんにちは」

「……こんにちは」

女性はキレイなドレスを着ていて、美しかった。

それでいてどこか上品だった。

「うーん、三人はシロウサギ様を捕まえようとしているのかしら？」

女性は質問をする。美雪は少し戸惑いながら答えた。

「そうです。でも……なぜそれを？」

女性はニコリと笑って答えた。

「ここでシロウサギ様を捕まえるのよ。私はここで大切な人を待ちつつ、ここに来る人のお世話をしているの。よろしくね」

八章（後書き）

次回に続きます。

九章

女性は、リズと名乗った。リズはここで大切な人を待っているらしい。

シロウサギ——あいつはきっと、彼女から何かを貰ったに違いない。

「シロウサギ様は必ずあなた達の前に現れるわ。現れたら、強い意志を持って捕まえて」

リズは美雪をみる。彼女はわかっているんだ。

オレと、クロがシロウサギに何を望んだのかも。

美雪が何も知らないことも。

「わかりました。あの、リズさん。ここはどこなんですか？」

美雪は不思議そうな顔で言う。

リズは何も言わない。ただ微笑んだ。そして——

「それはね、私に聞くべきじゃないのよ」

そう答えた。

その話題はそれきりだった。それから、たくさんある部屋の説明などをずらりと聞かされた。

オレとクロは風呂場へと足を運ぶ。

クロはニコニコとオレに話しかける。コイツは美雪に恋心を抱いている。

本人は無自覚だが、わかる。同じ人を好きになオレにはわかってしまった。

「美雪さんっていい人ですよ」

「美雪はオレをお人よしと言ってて、自分はその2割増しのお人よしだということに気づかないやつだよ」

クロはニコニコと笑って答えた。

「美雪さんが好きなんです、有心は」

不意打ちだった。今、こいつの目は知っている目だ。いつもの抜けたような感じじゃない。

オレは無言になる。つまり、答えはYES。

「僕も美雪さんは好きです。命の恩人です。有心、いいんですか？」

その意味が一瞬わからなかった。

いいんですか、伝えなくて――

オレは軽く笑って、答えた。

「いいんだよ。美雪はオレのこと、弟とかしか思っていないはずだし。それより、クロはどうなんだよ」

するとクロは、ニコッと笑った。

「伝えますよ。僕は後悔なんてしない生き方をしてきましたから。このまま通します」

その目は、どこか儚げだった。

クロはそれなりに覚悟を決めている。
命を落とす覚悟を――

九章（後書き）

続きます。

十章

城に来る途中から、オレと美雪は若干険悪ムードだった。
できればあまり、顔を合わせたくなかった。

「有心、来て」

「え？」

なのに、会ってしまった。

そこは城のてっぺんの部分。屋上、と呼ぶべきだろうか？

空には星が光る。最初のような、小さい子が書いたような不思議な
草じゃなくて普通の星。

オレは空を見上げる美雪をみる。

伝えなくていいんですか？

クロの問いかけがこだまする。

いいんだよ。オレはな、クロみたく純粹じゃないんだよ。

「何のよう？」

思わず声を低くする。これじゃあ、機嫌が悪いのが丸わかりだ。

「ねえ、私なんかした？」

「してない」

オレは美雪から目をそらす。

「じゃあ、なんでそんなに不機嫌なの？」

「・・・・・・」

もう少しで、別れるから。

そんなこと、言えるわけない。言ったら、美雪は間違いなくシロウサギを捕まえようとなんてしない。

「ねえ、クロとさっき話したんだよね」

クロと……少しだけイラついた。これはきっと、嫉妬に近いものだと思う。

クロに美雪をとられたくない。どろどろした、嫌な感情。

「へえ」

「クロにこの世界は何？　って聞いたらさ、『有心に聞いてください。有心が伝えるべきです』って言われたの。ねえ、有心」

ざわっ

風が吹く。

「この世界は……何？」

出た言葉は、自分でも酷いと思う言葉。

それを言って、オレは駆け出した。

逃げ出した。言いたくない。

オレは美雪を、生かしたい。

だから、シロウサギに頼んだんだ。

十章（後書き）

続きます。

十一章

僕は美雪さんに助けられた。美雪さんは命の恩人。そして、僕の叶うことのない初恋の人となった。

「この世界は何？」

美雪さんは僕にそう尋ねた。
僕が答える問いじゃない。

本当は言いたい。この世界は何かを伝えたい。
きつと、知っていた方が後から知るよりずっといいから。
でも、それを伝えるのは僕じゃない。

「有心に聞いてください」

有心は悩んでいた。イラついていた。
僕は気ままに、猫らしく生きてきた。そう、だから今も後悔しないように。

わずかに残った時間を――

「わかった、じゃあ有心に聞くね」
そういつて、有心を捜そうとする美雪さんを僕はとめた。

「美雪さん、言いたい事があります」

「何？」

「僕、美雪さんに助けられたんです。雨の日、傘をくれたんです。毎日おいしい、ご飯をくれました。ずっと伝えたかったんです」

「え？」

美雪さんは何が何やら分からない様子だ。それもそうだ。それでも、伝えたい。有心が伝えたら、きっと繋がる。ピースが集まればパズルは完成する。

「ありがとうございます。そして、僕は美雪さんが好きです」
僕は笑顔で言った。大好き。僕の初恋の人。

有心は僕が気づいていない、そう思っていたけど気づいてるんですよ。

でも、僕の初恋は有心が抱いているのと違うと思うんですよ。

きっと、僕の「初恋」は憧れにちかいものだから――

「あ、ありがとう。でも、クロの気持ちにはこたえられないの」
美雪さんはおろおろと言った。

「知ってます。さ、有心に聞きにいらしてください。もう少しで、美雪さんはシロウサギを捕まえますよ」

僕の「初恋」は叶わないけど。

伝えられて良かった。

猫のままじゃ伝わらないですね。

十一章（後書き）

展開が速いです。

もう少しで終わる予定です。あと五章前後です。

十二章

「あら、どうしたの」

話しかけてきたのはリズ。

落ち込んでいるオレの横にちょこんと座る。

「オレ、本当に最低です」

「美雪ちゃんと何かあったのかしら？」

この世界って何？

——美雪は知らなくてもいいんだよ。関係ないことだから、気にしないで

「って言ってしまったんですよ。関係あるのに。オレが辛いからって逃げ出して」

「美雪ちゃん一人だけ知らないって、きつとたまらなく不安だと思うわ。知らないことは知りたいでしょう？ それはきつと、知らないということが怖いからじゃないかしら？」

リズはニコリと笑って言う。

それは少しだけオレの心を慰めた。

「昔、美雪が子犬を拾ってきたんです。で、育ててたんですけどある日無残な姿で死んでいたんです。オレはその子犬の死体を見たん

ですけど、美雪は見えないし知らなかったんです。美雪は相当子犬をかわいがっていたんで、悲しむからと死んだって大人たちは伝えなかったんです」

あの時の記憶が蘇る。

「ねえ、あのわんちゃんはどこに行ったの？」

「飼い主が見つかったんだよ」

大人がそういつても、まだ美雪は問う。

「誰だったの？」

「それはね……。ああ、有心君が来てるよ遊んでおいで」

「ねえ、わんちゃんはどこに行ったか知ってる？」

オレはあまりにもしつこく聞いてくるので、真実を伝えた。

「あのね、わんちゃん死んでたの。もう帰ってこないんだって」

美雪は泣いて泣いて泣いた。

飼い主に飼われて幸せに暮らしている。そう伝えれば、よかったのかもしれない。

でも幼いオレにはそんなこと出来なかった。

それでも、美雪は知らないことは知りたい。と思っている。

それは、リズが言っていたように不安だから。

それを知ってても、オレは言わなかった。

リズは懐かしそうに話す。

「あのね、私が待っているのは何千年も生きる魔法使いなのよ」

「え？」

話がかなりとんだと思う。

「魔法使いって本当にいるのよ。その魔法使いと私は恋人で、私は人間だから先に死ぬの」

「そこで、シロウサギに頼んだんですか？」

「そう。シロウサギ様に頼んだの。あの人を待たせてくださいって。そうしたら叶えてくれたわ」

叶えてくれた、何かを支払って。

「私はね、ここに永遠にいるのよ。ここであなた達のような、人を案内するの。あの人を待ちながら」

そう話すリズは幸せそうだった。

「かれこれ100年近くここにいますわ。あの人が来たら、まず伝えるの」

今までこの想いが変わったことはないわ

「そしてね、あの人に一緒には行けないって伝えるわ」

ニコニコ笑っている。幸せそうに。

「後悔してないんですか？ 一緒に行けないのに……」

また一人になるのに。一人でココに来る人をむかえる。

それを永遠に続けるんだ。果てなく、永遠に。

「してないわよ。後悔しないのが私のポリシーだから」

後悔しないように生きてきたんです。

クロがそう言っていた。

きっと、今のままじゃ後悔する。

オレが不安にさせているんだ。美雪は、きっと不安でしかたがな
いはずだ。

仮にそれで美雪が傷ついたとしても。

これはただの自己満足だとしても。

「オレ、美雪に全て伝えます。後悔しないように」

オレの中で覚悟が決まった。

十三章

どうしてこうなったんだろう。

私は知りたかっただけで。

わけのわからないことだらけだ。

ここは何なのか。シロウサギは何者なのか。

そもそも私はなんで、ここにいるんだろう？

「不安で仕方ないよ。ねえ、有心」

そう呼んでも彼は来ない。

「有心のぼーか」

ちょっと叫んでみる。

「誰がバカだ。オレはたぶん、美雪より頭いいぞ」

「え？」

有心だった。え？ どうして？

混乱がさらに混乱する。あれ？ 混乱がさらに混乱ってなんだろう？

「有心、どうしたの？」

「その、さっきはごめん」

有心は少し照れていう。

「私のほうこそ……」

「不安だよな、知らないのって」

うん、不安だよ。

私だけ知らないのは嫌。

でも、それってわがままな気がする。

「ううん、いいの」

「いや、知ってて欲しいんだ」

いつになく有心はまじめな顔で私を見る。

「この世界が何なのかを。シロウサギが何者か。話そうと思う」

それはずっと知りたかった問いだ。

答えはすぐそこ。

——シロウサギはもう少しで捕まえられます。

なぜかその言葉がよぎった。

十四章

美雪が交通事故に会ったのはつい先日。
意識不明の重体だった。

オレは美雪が死なないように。ひたすらそう願った。
いつも美雪がえさを与えていた黒猫に、話したりもした。
とにかく、不安で仕方がなかった。

「どんなことでもするから、美雪を助けてくれ」

そう強く祈った。

すると、現れたのだ。

「彼女をたすけたいのか？」

現れたのは白いうさぎ。

きつと夢でも見ているんだろう。それでもいいや。

「はい。助けたいです」

「どんなことをしても？」

「はい」

どんなことをしても助けたい。
それは心のそこからの願いだ。

「では、助けてやろう」

「！」

「ただし、おまえの記憶を貰おう」
「記憶？」

美雪も、全て忘れる——それが条件だった。

忘れたくない。嫌だ。でも、

でも……美雪の命には代えられない

「美雪を……助けてください」

その後、クロとであった。クロは猫です。と言い張った。ということは猫なんだろう。

白いうさぎがしゃべった後なので信じてしまった。

「僕は自分の命を差し上げました。有心さんは記憶なんですね」
命——こいつは美雪に助けられたから。そういつていた。

クロはオレが考えている以上に鋭くて、天然で、純粹だ。

「有心でいいよ。同じ目的なんだしさ」
するとクロはニコリと笑った。

そこからは、今までたどってきた通り。

「じゃあ、私がシロウサギを捕まえたら……」

美雪は真っ青になっている。

オレは笑って背中をとんと押した。

「オレ達が好きでやったんだよ」

美雪は泣きそうだ。

誰だってそうだ。自分が助かって、周りが死んだりするんじゃないか
ることを心から喜べない。

「いやだよ、有心」

「生きれ」

「やだよ。ねえ、どうしてそんなことしたの」

ぽろ、ぽろ

美雪が涙を流す。

「どうしてって、大切だからだよ」

「ばか……。そんなことしたって、嬉しくないよ」

「オレたちの自己満足だよな」

「そうだよ、残される方の気持ちをわかってよ」

ぽろぽろぽろ

「有心の気持ち……。わからなくもないよ。私も……。そうしてるから」

「美雪、お願いしていい？」

「何？」

「オレ達のこと忘れないで」

「あたりまえでしょう。忘れないから」

ふわっ

現れたのはシロウサギ。

美雪は立ち尽くす。

サヨナラは近い。

オレはほとんど背中をおしてやった。

「忘れないから、絶対」

そうつぶやいて、シロウサギを――

捕まえた。

十五章

美雪がシロウサギを捕まえたたん、目の前が真っ白になった。

そういえば、シロウサギが何者か伝えてなかったな。

クロとかにもお礼言っ てないや。

結局後悔してるよ。

でも、悪い気はしないからいいか。

「有心？」

「え？ クロ？」

あれ？ クロの声が聞こえる。

「僕たち、あとしばらくこのままだそうです」

「そっか」

「リズさんに教えてもらいました」

そうだ、伝えなきゃ。

「ありがとうな、クロ」

「何がですか？」

鋭いくせして、こういのは鈍いらしい。

「いろいろだよ、いろいろ」

「僕も、ありがとうございます」

なにやら光が見える。

ああ、これで終わるんだな。

長い長い夢は。

「じゃあな、クロ」

そうつぶやいて意識を手離した。

意識が途切れる寸前、クロのさよならという声が聞こえたような気がした――

十六章

目覚めるとそこは病室だった。

そこでいろいろと聞かされた。

私が目覚めたのはキセキに近いこと。

有心が記憶喪失になったこと。

「シロウサギ、どこに行ったんだろう」

シロウサギは、捕まえた後「あとでまた来る」そう残していった。
それなのに来ない。

「来たぞ」

「え!？」

横をみるとシロウサギがいる。

ウサギがしゃべっていることに抵抗を感じるが、それは我慢する。

「ねえ、あの世界はあの世？」

「そうだ。正確にはあの世に繋がる道だな」

「じゃあ、明子さんや帽子屋、リズさんは何!？」

「明子は夫を待っている。調べればわかる。帽子屋は道案内だ。き

ちんと川を渡るためのな。リズは、お前達みたいな者の案内人で恋人を待っている。以上だ」

淡々と語られ、なんだか実感がわかない。淡々と語られなくても実感はわからないが。

「ねえ、聞いてなんてなんだけど教えていいの？」

「別に。教えたらダメという決まりはない」

そういうと、シロウサギは消えていった。

私はただただポカーンとするだけだ。

退院してすぐ私は、クロがいた場所へと向かった。
有心が話してた内容だと、クロは本当に猫だったんだ。

そこにクロはいなく、近所の人に尋ねると冷たくなっていたそう

だ。

私が目覚めた日に――

私は小さなお墓をたてた。

「ありがとう、クロ。おやすみなさい」

近所の人の言葉がよぎる。

――幸せそうな顔して眠っていたよ。野良でも幸せだったんだな。

いつも笑っていたクロ。笑顔が脳裏に蘇る。

絶対に忘れないよ。

おばあちゃんのお墓へと行くと、明子と記されていた。

ああ、おばあちゃんだったんだ。

待っている人はおじいちゃんだったんだ。

「こんにちは、おばあちゃん。ひさしぶりだね」

しばらくお墓の前で私は話していた。

「誰ですか？　もしかして、幼馴染の？」

本当に有心は忘れていた。全て。それでも、有心は有心だ。
私は、笑ってあいさつをした。

「そうよ。私は美雪。よろしくね、有心」

忘れないよ、全部。

絶対に忘れないから。

十六章（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました。
未熟な部分がたくさんありました。

それなのに読んでくださったって本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0381i/>

シロウサギを捕まえて

2010年10月11日19時36分発行